

映画に生れ映画に育った
 監督として文壇を歩いた
 影を遺るのか
 へつらひていつく月夜の
 影を遺るのか

タロ神戸年代記



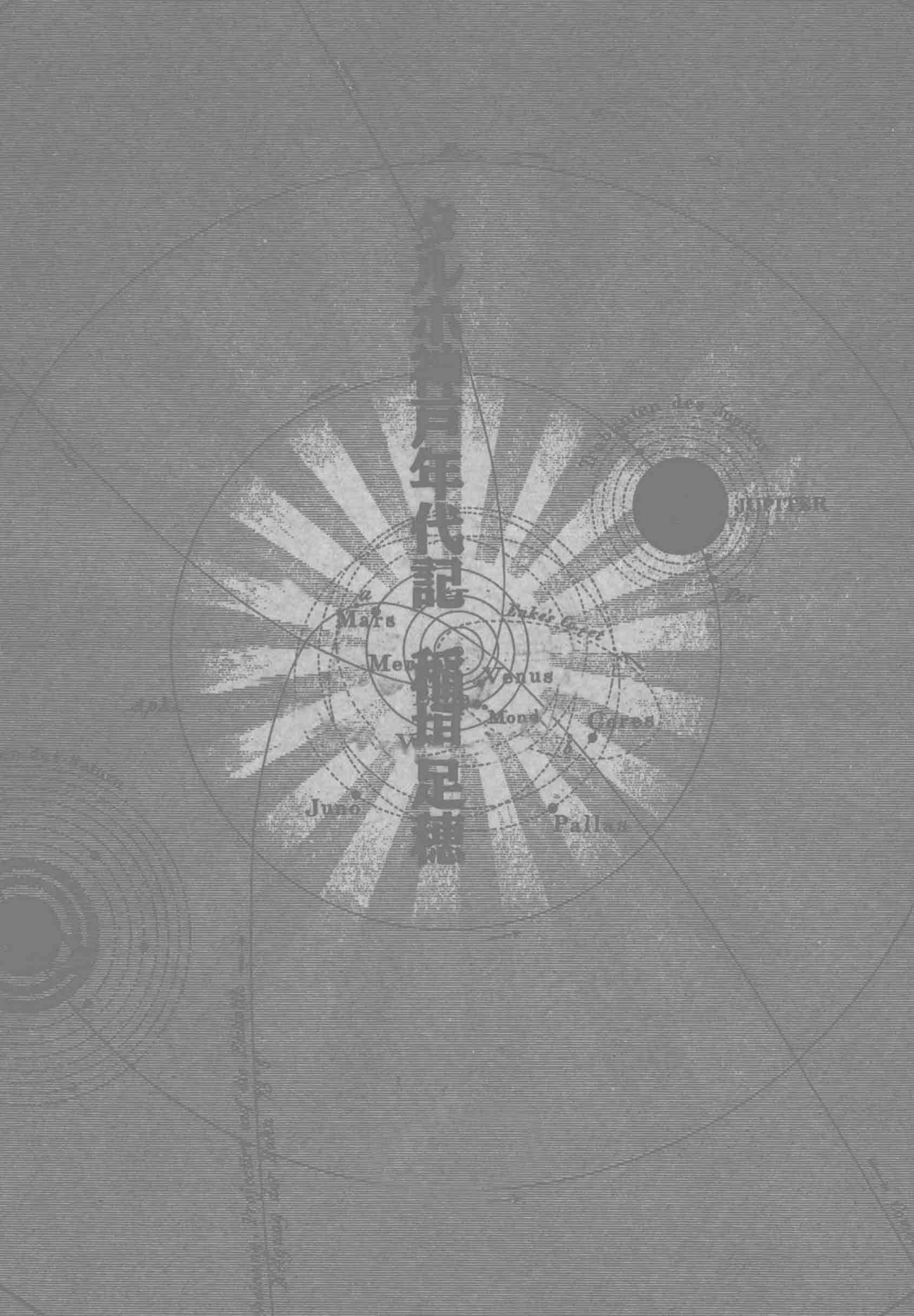
稲垣足穂

ニオインジャックがひらめき、ブラジル領事館の青空にとつて雲つないのか。元町の月夜の空に、巨きな
 アーゴオンがかかっているのか。なぜ、神戸の春と紫のパンジーとが関係あるのか。考えてみると、イタラ
 会社のフィルムのコマであり、それを映すのは君のようであり、ほくのようでもあり、十星の白い輪から銀
 河沿いに、満道の阪神の終点に降りてきた誰かなのか。夜空に坐ってヘロインパイプをふかしても解らない
 また、そいつは種類なのかい……

ある旧友からの言信

第九百九十九年代記

種田足總



タムホ神戸年代記

発行日

初版第一刷1990年4月25日

著者

稲垣足穂

発行者

栗生一郎

発行所

第三文明社 東京都千代田区三崎町1-1-9 〒101 振替 東京5-117823 電話 03-294-8731代
印刷・製本

明和印刷

装幀

戸田ツトム

装画

まりの・るうにい

©1990 Printed in Japan ISBN4-476-03159-5 C0095 ●落し本・乱し本はお取替えいたします

タムホ神戶年代記 穂垣足穂

第三文明社

タムホ神戶年代記目次

I

夢がしゃがんでいる	〇〇六
星は北に拱く夜の記	〇一二
堇とヘルメット	〇一八
古典物語	〇二七
RちゃんとSの話	〇六四
緑色の記憶	〇九一
或る小路の話	〇九九
鼻眼鏡	一〇八

II

きらきら草紙	一一八
明治大正少年氣質	一二五
緑の蔭―英国的断片	一四一

神戸三重奏	一七六
-------	-----

Ⅲ

蝸	一九二
北落師門	二〇二
夢野	二二〇

Ⅳ

星を造る人	二三八
星を売る店	二五三
煌ける城 きらめ	二六八
青い箱と紅い骸骨	二八〇
神戸漫談	二九四
木犀	二九八

編集・解説 宇宙的郷愁——高橋康雄	三〇一
-------------------	-----

作品年譜	三三三
------	-----

夢がしゃがんでいる

若し4だとすれば、斜線はそのままにして、たての線とよこの線を伸ばす。Aならば、凭れ合っているどちらか一方の線を延長します。そんな形になった辻が、私の通学の道すじにあつて、まんなかの三角形の区劃内に、三角形の玩具のような洋館が立っていました。二階建てでしたが、私にはその形をしたマシマロウのように思えて仕方がなかった。というのは、全体が薄い緑色に塗られて、しかも相当に年代が経ってペンキに粉がふいていたからなのです。何かの店かというに、そうでありません。何の看板も標札も出ていないこの家に、一つだけ付いているニス塗のドアが、広い通りに面して、いつもびったり締まっているきりです。と云つて住宅だとは受取れないし、事務所でも測候所でもなく、てんで見当のつかぬ妙な代物でした。

いったい何人がここに出入りしているのか、と私は、その前を通りかかる度毎に首をめぐらしました。しかし煉瓦の段々の上にあるドアはむろん、その両側の窓も、二階の窓も、裏手の窓も、いずれも錠戸が鎖されて、きのうきょうに開かれたけはいとて窺われません。空屋だったのかと思つたのは、二、三週間も経つてからでした。何故なら、鎖された戸口や窓は、いまは不在だという感じを与えていたのですから。そしていつも何処かに出掛けているあるじと云うのは、きつと閑な物好きな人物であつて、たいてい夜明けか、あるいはお昼前の、余り人に気づかれないような或る

制限を見計らつて、ひよいとドアを抜け出し、多分その奇妙な道楽によつてその一日を、時には数日間を過すであろう或る場所に出向いて、夜遅く蝙蝠こうもりのように舞い戻つてくることに相違ない。そんな想像を私はめぐらせていたのです。ところで空屋かなと気がつく、どうやらそうらしい。きれいではあるが、決して新らしいとは云えぬ小屋を彩つた緑は色褪あせて、いまでも述べたように、マシマロウを連想させるほど、所々剥げたペンキには粉がふいています。埃ほこりまみれの鎧戸よろいどの或る者には蝶番ちようつがいが外れています。かと云つて、別に荒れた気持も起させない。そればかりか、まるで表現派の舞台装置のような異形なものが、辻のまんなかにおつぱり出されているのに、きわめて物静かな調和があつて、一種の品の良さが覚えられるのでした。それで次の日、薄い朝靄がかかった三角辻を通つた私は、やはりここには誰か住んでいるのだと思ひ直しました。

連れがある時は、いまのような幻想は、家を見た瞬間だけに閃くのでしたが、自分一人の折には、私の編上靴が私からだを、そこからトアホテルの赤い円錐を頂いた塔の見える坂上へ連れて行くまで続きました。そして私は、自らでつち上げた探偵気分酔っている時があります。新教室にも馴れて、お昼前の退屈な授業時間などに、自分は晩春の陽ざしを眩しく照り返した若葉を窓外に眺めて、「ちようどいま頃だな」と思つて、この時刻にあのニス塗のドアを素早く抜け出て、その辺の露路に紛れ込んでしまふであらう緑色の家のあるじの姿を、あれこれと想像してみたことを、私は憶えています。

友だちに話したことがあります。それは日の当る所では青い色に見える帽子をかむつたOという混血児の同級生でしたが、私が前々から告げようとしながら、つい忘れていた件を持ち出すと、

「あ、三角辻のグリーンハウスかい」

と彼は頷うなづきました。

「ありや可笑しな家じゃないか。誰が住んでいるのだろう」と私はあとを続けました。

「さあ……」Oは首をかしげて、「ひよっとすると夢かも知れんぞ」

「何？ いや何だと云うんだ？」

「そうさ、あの家にはきつとこの都会の夢が棲んでいるんだぜ」

友達が繰返して、大きな目を剥きながら云って笑ったので、私もいつしよに笑いました。あとになってみると、奇妙に彼の何気ない言葉が中^{あた}つていっているような気がするのです。私はその日の帰途に、待ちかまえるようにしてグリーンハウスの、埃の積んだ二階の錠戸を見上げました。

ここに夢が棲んでいるのだとすれば、それは二階であろう。そこには緑色のカーペットが敷いてあり、緑色のカーテンが下つて、緑色の天鵞絨^{ビロード}を張った椅子があつて、いつもたいそうきれいに掃除されて、塵一つ見つからぬに相違ない。

——こう想像を走らせると、その通りの品物が、小さな空屋のドアをあけて階段を登ってみると現にあるような気がするのです。じゃそこに居る「夢」はどんな恰好をした者であろう？ 家の前を過ぎて広い坂道を下りながら私は続けました。——相手はなにか長い白髯を垂らしたおじいさんのようである。そのおじいさんの「夢」が、窓々を鎖した不等辺三角形の二階の床のまんなかにながみ込んで、たぶんその前でちらちら揺れている蠟燭の灯に我が影を、天井と壁一杯に投じて、じいっと夜も昼も身動きもしないでいるようだ。が、それとはまるで反対な、スミス先生の姪^{めい}のゲギーさんのような、ピンク色のワンピースを着た少女のようでもある。そしてそのバネ仕掛の人形のように快活な「夢」が、あの真白い聖ポーロの胸像があるゲギーさんの家へ自分が遊びに行った夕べのように、緑色の敷物の上で蓄音器に合わして、びんびん踊っているのであるまいか？ いやそれよりもっとへんなもの、ピカビアの意匠にあるような、赤い三角や白い球や青い立方体から成ったグロテスクなお化けのようでもある。それとも、人間の眼には見えぬ透

き徹った霧のかたまりで、これが場合によつて何にでも変化するのか知らず。以来、さまざまな形で「夢」は頭を擡げるのでした。宝石の屑のような星々が満天にばら蒔かれて狂おしい初夏の夜など、真夜中すぎに緑色の小屋のドアから首を出した「夢」が、通りを横切り、マンターの裾を引き摺って、そしてたぶんシルクハットを斜めにかむって、左手にカンテラ、右手に杖、両側に玩具めく洋館がごちゃごちゃと積み重なっている山裾の狭い段々をよちよちと登って行くさまが、私には眼の前に見えているように描かれました。——そんな話を〇に聞かせると、彼はまつげの長い眼を輝かせて、「自分に午前一時頃、あの家の入口の左右には、クラブの形とスパー드의形をした、いずれも葉の密生した植木が立っているような気がする」などと、彼らしいことを説くのでした。学校への往復の途次に見る小さな三角形の家には、このようにわれわれの或る奇妙な、軽快な、それでいてどこかに哀愁をこめた童話風な憧れの心持が托されていました。とは云え、友達と喋りながらそこへ来かかる時は全く閑却されています。巴里製の香水壺のような洒落た夢心地をそり立てる緑色の家の他に、われわれには目下湊川新開地の朝日館で上映されている連続冒険活劇や、また鳴尾競馬場での飛行機大会があったからです。

もう私が四年生であつた頃でした。その時になつても三角辻のグリーンハウスは、三年前に初めて中学生になつた自分、いそいそとした新学期の通学の途中で見かけたのと、別に変わりもなく立っていたのです。ちょうどその春が去つて、海のかなたから紺と褐色の燕がやってくると共に、私達の制服が霜降の夏いでたちに変つた日の午後のことです。

私が例の辻に差しかかると、緑色の家の前に人だかりがあるのでした。それは大旨退け時刻にあつた附近の小学生でしたが、私はグリーンハウスの上に何事が起つてゐることを直観しました。それを知るなり私は、足掛け四年にわたつて好奇心の対象だつた洋館に、そんな異常を見かけた自分は駆け付けたかと云うに、決してそうではありません。只面倒臭い気がしました。で、そのまま歩調も変えずに近付くと、ニス塗のドアが開いて、その向うに階段と帽子掛の円鏡

とが見えました。にも拘らず通りすがりにちらつとその方へ首を曲げただけで、私は行き過ぎました。私のすぐ前を、日頃から注意していた下級生が歩を進めていたからです。私は学校の門を出た時から、先方の交互に踏み出されるうしろ姿のズボンの上部に、Tの字の皺しわが出来て、それが足の運びにつれてTとなり1となるのを見ながら、あとをつけてきたのでした。今迄にもこんな機会をたびたび取り逃していたので、ひとつ今日こそは相手の家を見当づけようと、私は張り切っていました。といって、Tの変化ばかりに氣を取られていたわけではありません。正直なところ、三角辻に人だかりを認めた時、その少年もそこに立ち止るだろうと思いました。そうなったら、自分は傍に立って、先方の首すじの生えざわや、粉がふいたような頬のラインを、触れるばかりにして眺めることができようし、そればかりでなく、緑色の家をきっかけに何か話しかけてもよいことになるかも知れない。ところが手前勝手な予想は脆くも眼前にぶち壊され、少年は只人が集っているのをちよつと見返したのみで、やはり先のように、蝶の形にインキのしみがついた白い教科書の包みをかかえて通り過ぎて行つたのです。軽い失望に打たれた私は、それでも、そんな物見高いことを好まないでいる相手を、床しいことに思い直して、自分もこんどは、Tではなく、彼の恰好のいい靴のかかとの所を見守りながら、ついて行つたのでした。

推移は学校の上に、私の上に、私の友達の上にめぐりました。しかし山手通りの入口にあるグリーンハウスだけは、テニスコート脇くわの櫟林くわばやしが切り拓かれて、そこに総煉瓦の大講堂が出来ても、苺畑であった学校のぐるりに家が建ちつんできても、市電終点から学校まで続いた一本道に線路延長が始まって、やはり昔通りに、オートモビルがひっきりなしに行き交う三角辻の中心に、埃を浴びながら、妙にひっそりしたアトモスフィアを伴って、取残されたように、また一切から超越したかのように、立っていました。その四年生の第二学期に、「あそこには都会の夢が棲んでいる」と洩したOがアメリカへ去り、「こちらには霧が多いので、夜になると水底に住んでいるような氣がする」そんな文句を書

サン・フランシスコ

いた。桑港からの絵葉書が私に届いた時にも、それから早くも卒業することになった私が、式場の瓶に差してあった桃の花の印象の中に、過ぎ去った五年間の事共を結びつけて、三角辻へ来かかった時にも、小さな緑色の家は、紫ばんだ空の下に、五年間を通して見たのと変りもなく立っていました。

更に三年経過した去年の夏、少年時代を過した海港へ立帰った私が、山手の三角辻を通ってみると、もうグリーンハウスはなくなり、そこは只の芝生になっていました。三角形の石囲いに添うて、ドロップのような松葉牡丹が埃を浴びていました。それだけのことでした。なにもあの春の終りの午後に、どうして自分はここに立止って年来の疑問を釈こうとはしなかったのだろうか？ そんなことを思ったわけではありません。

「夢がしゃがんでいる……」

そんなことを何気なしに呟きながら、私は芝生の脇を抜けて、港の街の賑やかな方へゆるい坂を下って行きました。

星は北に拱く夜の記

へ烏鵲^{かさぎ}の橋のもとに紅葉を敷き、二星の館の前に風冷ややかに夜も更けて……

これは然し其夜も遅くなってからの話で、夕方には未だ八月のかかりの昼間の汗が残っていた。海岸通りの高いビルディングの屋上に赤いランターンが並んで、その下の受付で貰った同窓会名簿を鉢植の棕櫚^{しゅろ}の蔭でひらいて、私は、黒星のついた彼の名を見付けたのだった。

焼失校舎の再建中で、雨降りでなかったならば、毎朝のチャペルは芝生で行われていた。その時間に、私の直ぐ前に居たのが彼だ。両手を小脇に当て、片方の靴先で軽く地面を蹴りながら、彼は正面の紫色の山並を見やっていた。少し斜めの位置に、長い睫毛^{まつげ}のあるその栗色^{なめいろ}の頬のラインを眺めていると、音楽的幻想がアルペジオのように湧き上って来た。それはテニスコートの隅で拾った白いボール、櫟林^{くもきばやし}に置き忘れた詩集のロングフェロー、また峰続きの六甲の天鷲絨^{ビロウド}張の山肌を越えて行く雲の影であった。或る時、私の級友が、彼とそっくり其儘の姿勢をしていることに気が付いたのだ、誰の真似をしているのかと声を掛けたら、相手はひどく狼狽^{ろうばい}して真赤になり、それから妙な溝が出来てしまった。実は私自身も、六甲山の池でスケート靴を穿いて立上った途端、思わずよろけて、直ぐ前に居合せた彼の肩を掴えたも

のだ。どうした、夢でも見たのかなどと傍えの者に云われ、取り逆上^{さか}せて、そのまま氷の下へ潜り込みたくなった。どういう理由か、彼のことになんは触れたがらなかった。或る昼休みの品評会に彼の名が出た。そうすると、この種の話題を牛耳っている某が、「そんなことを持ち出して君達はどうしようと云うのか！」と憤ったように云った。それで座が急に白け渡ってしまった。

正門前から並木になった金木屋の大樹に、秋も十月にはいると、脆い樺色の粉を零す細かな星形花が一杯につく。道を左右に跨いで広々としたカナダ人の屋敷があった。そして紅殻色のバンガロウが見える方に怕い緑色の眼をした老人が立現われて怒鳴り付けるのだったが、そんなことにお構いなしにみんなはあの小枝を取ろうとした。飛び上ると枝に手が届いたからである。今朝も誰かが登校の途中で枝を取ったことが直ぐに知れた。あの樺色の端くれは何処に匿されていても、廊下じゅうに香るから。遙か敏馬沖の上空を過ぎる定期アエロの響きが澄んで、少年の瞳も愈々冴えて行くような日に、アメサン館の金木屋の香は効果を増した。その香りは学校から十四五哩を距てた我家に持ち越されることがある。郊外の高台の家で鳴っている小鼓の音が韻を籠めて伝わってくる夜、私はまだ残留している木屋の香に、彼のさまざまな姿勢を托そうとしたことを、よく憶えている。

こんな季節の或る朝、私は汽車に乗り遅れて郊外電車を利用した。須磨に停った時、前方のドアをあけてはいってき私^{わたし}のちょうど前の席に腰をおろした、その白い教科書の包みを小脇にした少年が、彼である。気がついてアツという風に頭を下げたのに返礼して、私は気を鎮めようと努めながら、今頃どうしてこんな所から……と考えずに居られない。彼の家は米の仲買店の筈であった。それで三階の音楽教室の窓辺に倚っている時など、私は思わず市街の、その方角に眼をやっている。そうすると、そのごちゃごちゃと薨を詰合わせた西方の空の彼方が微妙な色合に霞んでいたりする。

然しこの兵庫区水木通りの外に、須磨に別荘があると私は聞いていた。私が住んでいる明石も、西方の海寄りに、以前

隠居所だった小さな家があつて、私は此処へ友達を呼んで、月曜日の朝一緒に登校するようなことがあつた。又、余所の学校の話であつたが、AがBの許へ出掛け、勝手を知っているものだからつかつかとはいって行つて、襖すすまかドアをあけたところが、アツと云うなり、先方のBCも、こちらのAも、共に其場に凝固してしまつた。このエピソードも私は引き合はさずに納まらない。然し市電に乗換えた時、疑心暗鬼のアンダンテはアレグロに転向した。こうして上筒井の終点に降りてからは、互いに先となり後になり、木犀並木の間を通り抜けて、構内にはいつた。グラウンド脇の堤上を弓形に廻つて、静まり返つた校舎まで来ると、花盛りの並木からは先に立っていた彼が、不意にうしろを顧みてお辞儀をすると、そのまま階段を駆け上つてしまつた。

木犀少年は私より一つ級下で、彼の存在に気付いてから足掛三年になるが、一度も言葉を交えたことはない。これに反して、あの一月の終りの日、昼休みの芝生で見た初年級の少年とは、私は、話をするようになった途端に別れねばならなかつた。

卒業を目前に控えて、何か催物の下相談の為に、神学部前の芝生に集つていた時であつた。傍で遊んでいる一群の中に、みんなからかわれて困っている一人の少年があることに、私は気付いた。そりゃ君は天使だから、七不思議の一つだから……などと浴せかけられ、私の視線が気がついて彼は周章あわてて、特にしつこい相手の一人を制している風だつたが、ついに居たたまらなくなつて立ち上り、相手を追うて向うの方へ駆けて行つた。数日目の放課後に三階へ登ると、何かの予行が始まつていた。心持上向きの三日月形の口元に片えくぼがあつて、喉のきれいな先日の少年が、片隅に坐っているのに気付いた。折から司会者が次番を指そうとしている時だつた。その少年は私がいって来たのをちらりと見て、指先を自身の鼻がしらに当てて、今度はうちの番だと隣りの者に示していた。

渾名は'jumpin'であることが判つた。'jumpin'の住いは、正門前通りの一つ下の道で、筒井終点と学校との中間に当